
終わり亡き日々

rouge

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

終わり書き日々

【著者名】

NZマーク

N5381E

【作者名】

rouge

【あらすじ】

この世を牛耳る番犬。そんな番犬を目指している奥田明義。最後の試験にたどり着くも、いくつもの苦難が彼の前に憚る。彼が目指すその先にあるのは、何か。

プロローグ

この世、つまり俺の生きる世では、少しルールが違う。

小説に出てくる地球という天体は、法律で人を裁いているのは知っているだろう？

法で裁くのは同じだとしても、大まかに決められているものではなく、非常に細かい。

それこそ「ふざけるな！」と叫びたくなるほど細かに決められている。

その法を管理 といつては語弊があるかもしれないが するものがいる。

そのものたちを、人々は意をこめてこう呼ぶ。

『番犬』

まさに、国家を守る番犬そのもの。

しかし、それは人々が勝手につけたものであり、本当は違う。正式には、だうけんとうほうにん奪權渡法人といふ。

その名のとおり、人の人権を剥奪し、変わりに法を渡すという意味だ。

彼らはまるで冷酷なロボットのように、無慈悲で暴力をふるい、人を殺す。

もちろん彼らは罪に問われない。

そんなことならだれだって、『番犬』になりたい。

しかし、それは無理な話だ。

『番犬』となるには試験を突破しなければならない。

それは死よりもつらく、過酷なもの。

途中で投げ出すものや、不慮の事故により試験を続行できなくなつたもの、病気や怪我でやめざるを得ないもの、すべて殺される。生きられるのは最後まで残り、『番犬』となつたものだけだ。このことを国家は公としている。

よつて、自ら進んでいくものはそういうない。

また、『番犬』となつたあとも、大変だ。

周りの目は常に厳しい。

「『番犬』のせいで不自由な人生を送っている
「あいつらさえいなければ」

こんな不満を持っている人など何人もいるだろう。

自分の人間としての意思をほとんどなくしてしまつて試験をクリアしたもののはよいとして、必死に我を忘れまいと、試験を突破したものにしては、それはそれは生き地獄だろう。

ともかく、さまざま意をこめて人々は『番犬』とよんでいる。
ところで、奪権渡法人に罪を課せられるときは、どんなときか、
知つているだらうか？

一つは、その場で運悪く悪事　ささいなことでも罪といわれては逃
れられない　が見つかったとき。

もう一つは年に一回の検査を受けるとき。
前者は、例えば目上の人たちにタメ口を利いてしまつたのが見つかった
とすれば、

【第55条　今後一切の言語の乱れを禁止　更正期間3ヶ月】
という、法が与えられる。

こんな些細なものは、申告でもしないかぎりめつたに見つからない。
法は第1条から第999999条までみつちり決められている。
また、第　条の　部分が大きくなるにつれて、罪が重くなる。
罪が重くなるということは更正期間も長くなるということだ。

更正期間というものが過ぎれば、その人の罪は解消され、晴れて自由の身だ。

前科はこの国にはないので、何度も再犯したとしても、更正期間が
過ぎればまた自由。

しかし、この期間中に法を破れば、強制更正室きょうせいじゅうじしつといふところに入れ
られる。

この国には死刑制度はない。

その代わり、そこでは死よりもつらいことが待っているのは間違いないだろ？

後者は、毎年10／1にある検査に引っかかったものが適正な法を渡される。

暑い夏の終わりかけに、毎年決まって『番犬』が部下を率いて一人くる。

そのものが監督となり、テストに近いものをやらされる。

たいていの人はそれで終わり。

しかし引っかかつてしまつた人は、『番犬』直々に呼び出しをつけ、そこで法を渡される。

法の中には、周りの人が氣を使わなければならないものもある。

よつて、法は特例を除き、渡される人の右、もしくは左甲に印を押される。

スタンプのようなものだ。

ある特殊な液をつけなければ決して落ちることのない因果の鎖のようなもの。

その印は法によつて違つため、義務教育期間にすべての法を学ばさる。

まったくもつていやな世の中だ。

遅くなつたが、この俺、奥田明義おくだあきよしは奪権渡法人をめざしてこる。

まったくもつていやな野郎だ。

始まり、出会い、

「こねえなあ」

「ですね……」

田が広がる道端で、さつきからこの会話しかしていない。隣の人は、俺と同じように【仮】奪権渡法人の女性である。名前は知らない。

無言が続き、

「まだかよ、ちくしょー」

「きませんね……」

の、繰り返し。

さて、暇なので俺たちは何をしているのか話しておこう。

俺はついこないだまで地獄にいた。

試験を受けている俺は、今、やつとの思いで最終試験までたどりついた。

一次試験は、精神力を見る試験だった。

これは自分で気がおかしくなるかと思った。

暗い部屋の真ん中に連れて行かれて、周りを囲まれる。

俺は手足に手錠をかけられる。

取り囲んでいる人たちはみな、銃を構えて俺を見下ろしている。

そして上官は言う。

「お前は弱い。もういい。助けてくれといえば助けてやる。いわなければ今から2~4時間後に殺す」

そして出て行く。

それからは一言も喋らない、喋ってはならない空気が流れれる。

そして、23時間59分が経過したところで、試験が終了した。生きているのか、死んでいるのかわからなかつた。

思い出すだけで身の毛がよだつ。

二次試験は限界を知る試験だった。

ある部屋に閉じ込められ、食料も、水も与えられなかつた。

閉じ込められる前に、上官は言つた。

「3日だ。3日耐え切つたら合格だ」

そういう残し、無線機と俺をおいていつた。

俺は、5日耐えた。

それは間違いではなかつた。

閉じ込められたのは俺だけではなく、数十人とともにに入れられた。そして、3日経過したとわかり、すぐに部屋から出たものは一人残らず死んだ。

気持ちが悪くなる。

三次試験は運だつた。

「サイコロを振り、5以上の目が出たものは合格とする」この上官の言葉には、俺を含め、ともに試験を受けた皆が絶句した。この試験まで、どれだけの思いをしてきたかそれが、打ち碎かれた気がした。

しかし、振らざるを得ない。

銃を構えた警備員の隣で、振ったサイコロの目は5だつた。喜びを隠せずにいると、上官は言つた。

不運にも、俺がサイコロをふつたのは最初だつた。

「この男は5を出した。この男は死なない。しかしお前らは死ぬかもしれない。この男が憎いだろ、え？」

皆の妬みが、俺をねじりつぶすかと思つた。喜びが、絶望にかわつた。

あのときの気持ちのはつきりと覚えている。

四次試験は……

「二人だけか」

はつと氣づくと、目の前に男の上官がいた。

「奥田明義です」

軽く頭を下げた。

「管野そらです」

そらといつとも、同じように頭を下げた。

上官は、どうやら田が悪いようだ、片目に眼帯をしていった。まだまだせみは鳴きやまない、暑さを感じさせる日々が続いているが、彼はきつちりと紺のスージを着込んでいる。

が、汗一つ流れない。

「まず、最終試験までこれたことに心から祝福しよう」

祝福の気持ちがまるで伝わってこない低い声で言った。

「私はこれからお前たちの監督となる赤城だ。あかぎこれから2ヶ月間、この田舎町であることをやつてもいい」

「あることは?」

「発言は認めん」

低く、威厳のある声と、ライオンよりも恐ろしい田でにらみつけられる。

そのとき、今までの上官とは何もかもが違うと悟った。

「今、第37次試験の続きで疲れがたまっているだろ?」

休ませてはくれないだろう。

「休んでもかまわない。しかし、するべきことを見つけ出すのも、大切だ」

余韻を残すように、語尾を少し伸ばしたあと、一時の沈黙。冷や汗が背中を伝っていくのがわかる。

「何をしている。一人には一分、一秒もおじいとおもうのだが?」

口早に、そういった。

「失礼します」

立ち去るうとしたときだった。

「だれが、行つていいと言つた　？」

(矛盾しそぎだぜ……)

「ひ……！？」

振り向くと、銃口が目の前にあつた。

思わず息を呑んだ。

「お前は、間違つてゐる。自分より上のものと接するにあたり、どうすれば相手に不快感をあたえずには済むか、指導されているはずだな？」

「はい」

見開いた片目は殺氣だけで、一般人を殺せてしまつと思われる。その目を決してそらさないよう、氣をつけながら、一言一言言つ。「私が不快感を与えたなら、謝ります。しかし、先生の先ほどの述べた言葉では、私には立ち去れ、といわれたように感じました」「それで？」

「先生のお言葉は不十分でした」

しまつた、と思つた。

もう遅い。

赤城の口元がつりあがり、不気味な歯が姿を現す。

「面白い。この目から逸らさなかつたこともそうだが、反抗してくるとはなあ……命知らずなものよ」

死を覚悟したが、銃口は地へと向いていた。

「今回は見逃そう。行け」

「失礼します」

「失礼します」

死ぬかと思った。

背を向け、歩き出す。

菅野が隣にいることを忘れていた。

赤城から数百メートルはなれたところで、やつと緊張の糸が切れた。

「死ぬかと思った……」

肩の力をふつと抜いたときだった。

ヒュンツ

頬を何かがかすつた。

少し遅れて、痛みが走る。

「う……」

出血し、血が滴り落せる。

「気を抜くな！！」

そう、聞こえた。

たかがハンドガンで、これ程の距離で正確に撃つてへくるとは
赤城に、恐怖すら覚えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5381e/>

終わり亡き日々

2010年10月28日07時07分発行